【コラム４】　教育実践コラボレーション・センターにおける一大学院生の成長

大下卓司（京都大学）

本コラムでは、教育実践コラボレーション・センターにおける日中共同研究センターの取り組みを、一人の院生の成長過程に即して概観してみます。2006 年、京都大学大学院教育学研究科と中国中央教育科学研究所との間に学術交流の協定が成立し、翌年には日中教育共同研究センターが設立されました。本センターは、日中両国の間で問題を共有し、限定的かつ具体的な研究課題に取り組むこと、そして、両国の教育研究・実践の進展に寄与する成果を着実に蓄積しつつ、息の長い学術交流を実現させることを目指してきました。私は、設立当初から本研究に関わるとともに、研究の方法論を学んできました。

具体的には次の 2 つの計画が進められてきました。第一は、日中の小学生を対象とする学力比較調査です。第二は、日中の小学校における授業研究です。この二つの研究を連動させ、平素の授業実践と子どもの学力との関係を明らかにすることが目指されています。2010 年には PISA2009 の結果が公開され、上海の子どもの高い学力が示されました。昨今急速な教育改革が進められている中国の学校教育を検討することは、日本の教育研究にとっても示唆的であると期待しています。

日中教育共同研究センター設立後間もなく、京都大学の研究チームにおいて定例研究会が立ち上げられ、教育方法学研究者や、比較教育学、認知心理学といった様々な分野の研究者が集まりました。研究の過程で算数の教科を対象とすることになりました。私は算数・数学教育に研究関心があったため、ここで日中の小学校算数のカリキュラムや教科書の比較を行い、報告しました。その中で、例えば単元「分数」において、日本は民間教育研究団体の影響を受け、1/3m のテープといった量を基礎とする「量分数」が指導される一方で、中国はスイカの 1/8 など、ものを分割した割合を示す「分割分数」に基づいて指導されているなどの相違が明らかになりました。このことの背景には、日本が算数に内在する理論の理解や習得を目指すのに対し、中国は「素質教育」に基づいて、概念をシンプルに学び、知的ツールの獲得を目指しているという数学教育観の相違があります。こうした基礎的かつ具体的な研究を土台に、継続的に日中合同会議を開催し、両国の算数教育を比較するとともに、両国の研究者が互いに学校を見学してきました。

以上の研究において、教科書を素材とした研究方法は、私が所属する教育方法学研究室と京都市の公立小学校との共同授業研究において、授業づくりの基本的な方法として活きています。また、私自身が専門とする近代イギリスの数学教育においても、教科書を当時の教育を描く基礎的な史料として位置づけて研究を行っています。大学院生の期間に、本

研究プロジェクトに参加することで、具体的な現象から教育理論を読み解くという教育方法学者としての素養を身につけていくことができました。